

屋内型の映像制作用 4K リモートカメラの最上位モデルを発売
4K/60P の高画質映像で放送局や大規模イベントなどのハイレベルな映像制作を支援

キヤノンは、IP※1 によるリモートプロダクションを実現する、映像制作用リモートカメラシステムの新製品として、屋内型の 4K リモートカメラ“CR-N700”を 2022 年 12 月下旬に発売します。



CR-N700



スポーツのライブ中継などハイレベルな映像制作
現場で使用可能



バーチャル映像を活用した番組制作にも好適
(イメージ)

近年、映像制作市場では、映像コンテンツの需要増加にともない、IP によるリモートプロダクションへのニーズが高まっています。このような背景のもと、キヤノンは、2021 年春にリモートプロダクション市場に参入し、屋内型のミドルレンジモデル「CR-N500」（2021 年 5 月発売）と同エントリーモデル「CR-N300」（2021 年 6 月発売）を投入してきました。新製品“CR-N700”は、これら 2 機種の上位機種として、放送局を中心としたニュース、ドラマ番組の制作や大規模なスポーツイベント、コンサートのライブ中継など、高画質にこだわるハイレベルな映像制作を支援します。

1. プロのニーズに応える豊かな映像表現

光学 15 倍ズームレンズ、1.0 型 CMOS センサー、映像処理プラットフォーム「DIGIC DV7」など、業務用ビデオカメラで培った技術を生かしたキーデバイスを搭載し、4K/60P/4:2:2/10bit の高品位な映像撮影が可能です。また、キヤノンの屋内型の映像制作用リモートカメラとして初めて HDR 撮影にも対応し、「HLG（Hybrid Log-Gamma）」と「PQ（Perceptual Quantization）」の 2 つの方式から用途に応じた選択が可能です。

2. 快適な撮影を実現する AF 性能

動画撮影に適した AF 動作と高い追従性を有する「デュアルピクセル CMOS AF」に加えて、キヤノンの映像制作用リモートカメラとして初めて「瞳検出 AF」と「頭部検知 AF」を搭載しました。より高速・高精度で安定した被写体検出・追尾を実現し、スポーツなど被写体の動作が激しい撮影でも粘り強くピントを追従します。

3. 豊富な通信プロトコルに対応

キヤノン独自の IP「XC プロトコル」や映像制作業界で普及している「NDI®|HX※2」に加えて、高品質・低遅延・安全な映像伝送を特長に、近年、広く採用されている「SRT プロトコル※3」に標準対応しています。リモートカメラシステムとしての拡張性を高め、さまざまな機器との連携が可能です。また、リモートプロダクション同様に、近年、新たな映像制作手法として注目が高まっているバーチャルプロダクションにおいても手軽に利用ができるよう、バーチャルスタジオソフトとの親和性が高い「free-d プロトコル※4」にも対応し、高品質な VR/AR 映像制作に貢献します。

※1. 「Internet Protocol」の略。インターネット上で情報のやり取りをする際の通信方式。

※2. 米国 NewTek, Inc.が開発した映像伝送プロトコル。NDI は、NewTek, Inc.の米国およびその他の国における商標または登録商標です。

※3. Haivision 社によって開発、オープンソース化され、SRT Alliance を通じてサポートされている映像伝送プロトコル。「Secure Reliable Transport」の略。

※4. 主にバーチャルスタジオシステムにおいてカメラのトラッキング情報伝達用に広く採用されているプロトコル。

製品名	希望小売価格	発売日
CR-N700	オープン価格	2022年12月下旬

-
- 一般の方のお問い合わせ先 : キヤノンお客様相談センター 0570-07-0032
 - リモートカメラシステムホームページ : canon.jp/remotecam

〈CR-N700 の主な特長〉

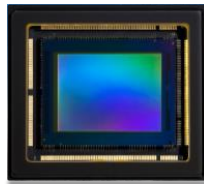
1. プロのニーズに応える豊かな映像表現

- 光学 15 倍ズームレンズ、1.0 型 CMOS センサー、映像処理プラットフォーム「DIGIC DV7」など、業務用ビデオカメラで培った技術を生かしたキーデバイスを搭載。4K/60P/4:2:2/10bit の高品位な映像撮影が可能。
- 「HLG (Hybrid Log-Gamma) 」と「PQ (Perceptual Quantization) 」の 2 つの HDR 方式に対応。
- フル HD 撮影時は 4K センサーを生かし、画質を保持したまま最大約 30 倍の「アドバンスズーム」が可能。
- 「赤外線撮影」機能を搭載。リアリティーショーや動物観察など、通常では撮影が困難な暗闇においても撮影が可能。

4K 対応 光学 15 倍ズームレンズ



1.0 型 CMOS センサー



映像処理プラットフォーム DIGIC DV 7



高画質を実現するキヤノンのキーデバイス



HDR 対応により階調豊かな映像表現が可能 (イメージ)



暗闇環境下での撮影に好適な「赤外線撮影」(イメージ)

2. 快適な撮影を実現する AF 性能

- 動画撮影に適した AF 動作と高い追従性を有する「デュアルピクセル CMOS AF」を搭載。画面内縦横最大約 80% の範囲で、素早く、自然なピント合わせが可能。
- より高速・高精度で安定した被写体検出・追尾を可能にする「瞳検出 AF」と「頭部検知 AF」。
- 「顔優先 AF」「顔限定 AF」「トラッキング AF」など、多彩な AF モードにより柔軟な AF 撮影が可能。



「デュアルピクセル CMOS AF」により高速・高精度な AF 撮影が可能



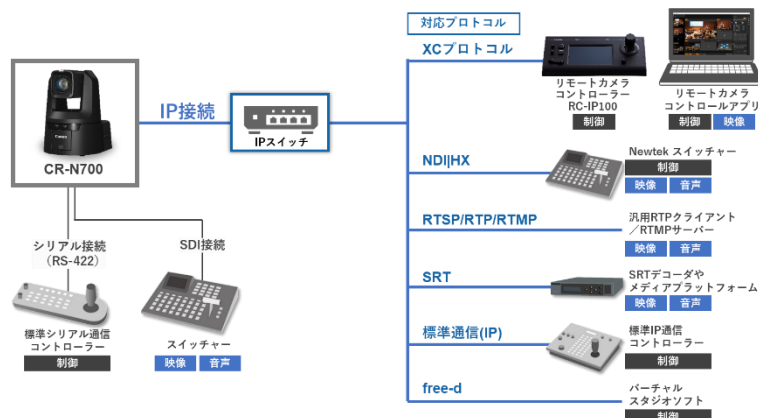
手前に別の被写体が映り込んでも「瞳検出 AF」が人物の瞳をしっかりとらえて粘り強く追従



より高精度で安定した被写体検出・追尾を可能にする「頭部検知 AF」

3. 豊富な通信プロトコルに対応

- キヤノン独自の IP「XC プロトコル」に対応。映像制作機器「CINEMA EOS SYSTEM^{※1}」との IP 連携も可能。
- 映像制作や放送の現場で普及している「NDI[®]|HX」に対応。
- 高品質・低遅延・安全な映像伝送を特長に、近年広く採用されている「SRT プロトコル」に対応。
- バーチャルスタジオソフトとの親和性が高い「free-d プロトコル」に対応。高品質な VR/AR 映像制作に貢献。



豊富な通信プロトコルに対応



「free-d プロトコル」対応により、需要が増すバーチャルプロダクションにおいても本製品の活用が可能

※1. 対象機種は、「EOS C500 Mark II」（2019年12月発売）および「EOS C300 Mark III」（2020年6月発売）です。当該機種を XC プロトコルで接続する場合は、機能拡張ユニット「EU-V1」（2019年12月発売）、「EU-V2」（2019年12月発売）、「EU-V3」（2022年11月中旬発売予定）のいずれかが必要になります。

4. 撮影の効率化につながる新たなアシスト機能を搭載

- 撮影した映像全体の出力と同時に、その一部分を切り出す「クロップ」機能に対応。画面内最大 2 か所をフル HD または HD 画質で出力可能。
- 映像出力の情報や画質パラメーター、カメラ設定値などを、HDMI または SDI で出力した撮影映像上に重ねて表示する「OSD^{※1}表示」に対応。ハードコントローラー操作時にカメラの状態を一目で確認可能。



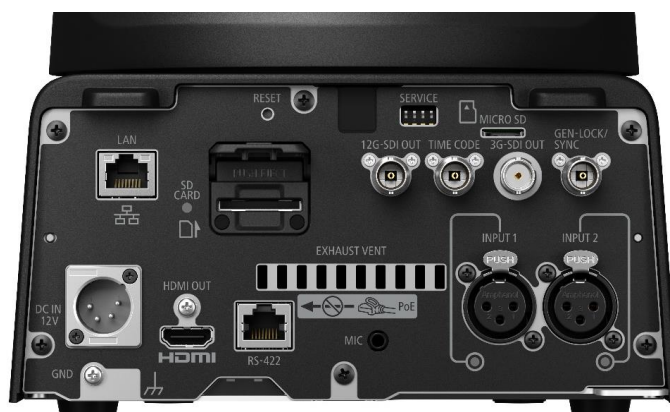
クロップ機能で最大 2 か所を切り出して出力することが可能

OSD 表示イメージ

※1. On Screen Display の略称。

5. 接続性と互換性に優れた入出力端子

- HDMI、IP 出力に加え、12G-SDI、3G-SDI の 2 系統の SDI 出力端子を搭載し、多彩な映像出力インターフェースに対応。クロップ機能を活用したマルチ配信も可能。
- 電源は汎用性の高い DC12V、XLR 端子（4 ピン）を採用。
- 映像制作の現場でオーディオ入力端子として広く用いられる XLR 音声端子（3 ピン）を採用。
- PoE++ 給電に対応。LAN ケーブル 1 本で給電、制御、配信が可能。



背面端子の構成

〈製品仕様について〉

製品仕様の詳細はキヤノンホームページをご参照ください。

<https://canon.jp/business/solution/pro-img-sys/remotecam/lineup/crn700>

〈ご参考〉

1. リモートカメラの市場動向

タブレットやスマートフォンなどのデバイスの普及により、多くの人があつても手軽に映像を視聴できる環境を手に入れています。これに伴い、近年、映像コンテンツの需要が急速に拡大し、録画映像・ライブ映像を問わず、多くの映像コンテンツが制作・配信されています。さらに、新型コロナウイルス感染症の影響でリモートによる映像制作・配信が加速しており、例えば教育分野における授業映像の配信、ビジネス分野におけるセミナー映像の配信などがさまざまな現場で普及しています。また、放送分野では、放送局・プロダクションがリモートカメラを用いた番組制作環境を構築しつつあります。このように、映像制作現場ではリモートによる低コスト化・省人化を実現する製品やソリューションに対するニーズが高まっています。（キヤノン調べ）

2. IBC2022 での製品展示

2022 年 9 月 9 日（金）から 12 日（月）までオランダ・アムステルダムで開催される国際放送機器展「IBC2022」のキヤノンブースにおいて、本製品を展示する予定です。